

博士論文（甲） 審査報告書

博士論文（甲）の審査を実施しましたので、下記の通りご報告申し上げます。

記

1 論文提出者 古谷浩

2 論文題目

当事者が拓いていった若年男性ガン患者のピアサポート・グループの参加体験

3 論文審査委員 主査 東亜大学大学院 客員教授 村山 正治
副査 東亜大学大学院 教授 桑野 浩明
副査 東亜大学大学院 教授 桑野 裕子

4 論文の内容

論文の構成は、以下の4章編成である。

- 1章 序論として男性ガン患者への支援状況の展望。
- 2章 第1研究 オートエスノグラフィー法を用いた入院治療体験からピアサポート・グループ創造までの自伝的記述、質的研究である。
- 3章 第2研究で、修正グランデットセオリー（M-GTA法）を用いて、ピアサポート・グループ参加者の体験分析を試み、ピアサポート・グループ（PSG）の特徴6要因を見いだした新しい知見である。
- 4章 総合考察とピアサポート・グループの意義。

新しく企画した「古谷ピアサポート・グループ」が日本のガン患者に展開されているプロセスの記述である。厚労省のガン支援プログラムの一環として全国の精巣ガン病院にピアサポート・グループの設置運動を古谷が中心で展開してきている。

医学系の専門誌に原著で掲載された意義

日本総合病院精神医学誌に「原著論文」として採択、掲載されていることに注目したい。これは臨床心理領域の研究が医学界研究誌に掲載された数少ない記念碑的、質的研究であり、臨床実践研究であることを高く評価したい。

本研究のどこがオリジナルなのか、どこからオリジナルが生まれてきているか

著者の古谷自身が31歳で精巣ガンに罹患した当事者であることが第一点である。長く入院、退院を繰り返しながらの長い病院生活の体験を、本人自身が東亜大学大学院臨床心理学

専攻に入学し、体験の諸相を博士論文にまとめる研究者として 7 年間生きてきている。長い精巣ガン患者としての病歴を持っている当事者であると共に、体験を研究する研究者である。当事者と研究者の二つの体験を古谷一人が実現しているところは他の研究に類を見ない。ガン体験の生の現実とその生活体験を研究することを生きて実践した数少ない事例である。「当事者」と「研究者」の二つの異なった体験から多様で役立つ豊かな視点が生まれてきているのである。

二つの質的研究方法を駆使していることに注目

第 1 研究に代表されるオートエスノグラフィー法である。この質的研究法は、最近、文化人類学などで活用されている新しい方法である。古谷自身のガン治療入院体験、同じガンの病で苦しんでいる仲間との出会い、自分の人生の危機、存在の意義、死の恐怖などに向き合い、自分の体験の意味を考察し、その意味を文化的、また社会的に考察しながら、サポートグループを生み出すプロセスが記述されている。第 1 研究は、彼のガン病体験から彼が大きな人格変化を起こし、仲間たちから相互理解や共感、支持を受ける相互援助の体験で救われる過程を記述している。そこからこの体験を他のガン患者に役立つ支援法の開発に向かうことに目覚め、動いていく感動的記録と考察が行われている。古谷の個人的病気体験が社会的意義を持つ支援法創造に仲間と共に動いていく援助プロセスが記述されている。第 2 研究では、M-GTA 法（修正グラウンデッドセオリー法）を駆使して、「古谷サポートグループ」の特質を明確にする研究を行い、後述する 6 要因を見いだすという大きな貢献を行った。

本研究のデータと結果

- 1) 2019 年 9 月—11 月に月 1 回、1 回 4 時間の「古谷ピアサポート・グループ」に参加した 6 名を対象とした。
- 2) 半構造化面接を行い、逐語記録を作成して、M-GTA 法で分析した。M-GTA 法により、6 要因が発見された。新しい知見である。6 要因は、①死との直面と生きたい想いの通底、②自分の存在意義を見いだす、③たわいもない対話、④つなぎ役としての機能、⑤現実を突きつけられる、⑥主治医への信頼と医療従事者の理解、から構成されている。

新サポート・グループの社会的意義

古谷の創造したサポート・グループは「古谷ピアサポート・グループ」として新しさと有効性を評価できるものである。厚生労働省が促進するガン対策基本計画にサポート・グループの必要性和具体化が明記されている。古谷は日本全国の精巣ガン病院にこのサポート・グループを設立するために活動している。この領域にまさに「静かな革命」が起こっていると評価しても過言でないと信じている。

5 公聴会の結果

本論文の公聴会は令和 7 年 1 月 21 日、2 号館 2607A 教室で 16 時 30 分から 17 時 30 分まで公開で実施された。古谷の発表後、二人の副査からコメント、助言、質問が行われた。これらについて、古谷は適切な説明を行い、質問への回答は納得のいくものであった。次いで公聴会参加の他専攻教員から「たわいもない対話」に修正意見が述べられ、古谷は納得し、修正、加筆を行う事を回答した。研究者自身が精巣ガンに罹患し、入院体験中に病棟のガン患者たちとの相互交流から「人間として生きることの大切さ」を学んだことが本研究の起点となっている。当事者としてピアサポート・グループを立ち上げ、継続実施した日本初めての研究である。さらにピアサポート体験の特徴を M-GTA 法により 6 要因を抽出した貢献は大きい。医学雑誌に掲載され、厚生省がこの古谷法を全国精巣ガン病棟に設置する行政措置を実施している。古谷は厚生省委託事業で全国の病院で指導している。以上から、本審査委員会は、本研究を当事者研究のオリジナリティと社会的意義の貢献に尽くしていると考え、博士（臨床心理学）授与に値するものと認める。